



近世小説の研究 秋成・西鶴・源内

著者	空井 伸一
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301乙第9386号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125683

近世小説の研究―秋成・西鶴・源内―

空井伸一

本研究は、日本近世期における文学受容のあり方として特徴的な「刊行された作品」を対象とし、その読みを通じて、特定の時代背景や限定的な人間関係だけに還元されない、「開かれたテキスト」であることの意義について考察するものである。

木版印刷という方法によって、それまでにない大量の書籍や版画が比較的安価に流通するようになったことが近世という時代の文化を画する決定的な特徴である。同一の版をもつて公刊されることによって、一人の手によって書かれたものは多くの見知らぬ人々の手に委ねられ、知識は開かれ、共有され、吟味され、それを踏まえて更に新たなものが書き起こされることにもなる。それにより、例えば江戸期における古典の集大成ということも可能となった。今日私たちが「古典」と見なすものの多く、そしてそれらがなぜそのように見なされるのかという理由付けは、書籍の公刊が可能とした知識の共有に因るところが大きい。江戸の板本の多くの表記は「くずし字」によってなされ、今日の書籍とは趣を異にするが、書かれたものが不特定多数の人々の手に渡り、ひとりひとりがそれに向かい合って主体的に読むという行為は、例えば近代小説の受容のあり方と基本的に変わるところはない。それは電子メディアなど媒体を変えとしても、これからも変わることなく行われることだろう。本研究は、日本古典文学史の上では初期読本、浮世草子、戯作などといった用語を以て称される作品を取り上げるが、それらを「近世小説」の名称をもって括る理由はここにある。

研究の対象として、上田秋成、井原西鶴、平賀源内という三人の作者につき、具体的にその作品を取り上げ、作品論のかたちで個別に考察する。この三人はかつて、江戸における近代の萌芽、先駆者などと見なされ、それをもって評価されることがあった。一時期は封建制に対する抵抗者、あるいは犠牲者などと祭り上げられるようなこともあった。しかし近年、当時の資料に基づく検証が進められるなかで、彼ら自身に反時代的な意識など認めようもなく、江戸の封建制を自明のこととして受け止め、その中で手遊びとしての文事、いわゆる「戯作」に遊んだことが指摘されるようになる。その結果、彼らに近代を見るのは、そのように見る側の願望の投影でしかないと批判されるようにもなった。

この批判自体はしかるべきことであり、作品がものされた当代の思潮、価値観を踏まえることは前提とされなければならない。しかし、その作品をどう読むかということになれば話は別であろう。完璧に「閉じたテキスト」でもなければ、そこに作者の意図しなかった、作者

にも統御できなかった何ものかが生じるといふことはあり得る。そしておよそ完璧といふことは世にあり得ないわけで、そこにこそ時代に制約されない何ものかが生まれ、読み取られるといふことはあるのだ。文学テキストの価値は同時代の評価、例えば雅俗の規範こそすべてといふことであるはずがない。優れた文学テキストといふものは、作者の意図や同時代の共通理解をはみ出してしまふことで、ある種の普遍性に到達するものだとは私は考えている。公刊による「開かれたテキスト」はそれを可能とさせるツールのひとつであり、封建下の、文字通りの前近代社会である江戸期においても、近代的な読みに堪える、そして更に普遍をも垣間見せるテキストはあり得たと私は考えている。三人の作品のうち、特に上田秋成の『雨月物語』はこのことを顕著にうかがわせるものと思われる。それは生みの親に名乗りを上げてもらえなかった、うち捨てられたかのような若書きの作であり、最晩年に書きのかたちで為された『春雨物語』に対して、俗なる体裁を取るものだが、にもかかわらず、むしろそれ故に、時代の制約を受けない達成を見せている。本研究はどのように江戸の「開かれたテキスト」が普遍へと通じる可能性について論究する。また、それを踏まえ、一国や一時代の文化や伝統を賛美し、それを規範と見なすような発想に対して批判的考察を加え、自文化中心主義や「国文学」なる学の問題についての検討にも及んだ。

次に、全体の構成について示す。

第一章では主に『雨月物語』各篇についてその所収順に論じた。但し第5節で論じる「仏法僧」と「蛇性の姪」については「芥子」という手がかりによって論じたひとつの考察となるため、所収順序通りではない。また、第6節は『雨月』中の作品、近世という時代の枠を越え、「無常」や「死体描写」といった観点から「吉備津の釜」の結末部分の考察に及んだものである。第9節は『雨月物語』に先立つ秋成の著作第一作『諸道聴耳世間狙』の二篇を論じたものである。いわゆる「気質物」に系譜付けられる作品だが、そこに描かれる偏執の人々は、抜きがたい怨念や愛執の深淵に落ちる者たちを描く『雨月』に先んずるものと目される。その特質について論じた。

第二章では井原西鶴の、第三章では平賀源内の作品を取り上げる。前述した江戸に近代を見ることへの批判において言われるのが、中野三敏のいわゆる「西鶴戯作説」であり、その際西鶴同様「戯作」の典型として引かれるのが源内の行文である。『雨月物語』からおおよそ九〇年ほど遡る、江戸散文に画期を成したとされる西鶴と、秋成とほぼ同時代の空気を吸いながら筆を揮った源内。それらが、中野の言うところの「戯作的文体の見本」の枠に収まるだけのものなのか、考察を加えた。

第四章では、一国や一時代の文化や伝統を賛美し、それを規範と見なすような発想に対して批判的考察を加え、自文化中心主義や「国文学」なる学の問題についての検討に及んだ。

終章においては、上田秋成の研究史を『雨月物語』と『春雨物語』を対照しつつ概観し、公刊されたテキストと手書きのテキストのそれぞれの意義について考察し、本研究で述べてきたところを改めて総括した。

次に各論の梗概を示す。

第一章 秋成を読む

1. 「白峯」に見る「和」——「隔生即忘」を強いる西行——

『雨月物語』冒頭的一篇、「白峯」において用いられる仏教語「隔生即忘」について、従来の注釈では恨みを忘れて成仏することと解し、肯定的に捉えてきた。しかしその用例を精査すれば、前生の忘却は仏教的には望ましくないことが明らかとなる。「白峯」の用例、そして従来の注釈は明らかに誤読である。しかし問題は誤読自体より、「隔生即忘」を肯定的に見なしてきた受容史からうかがえる、「和」を無前提に正しいと見なす政治的発想にある。西行の言説が非論理的であるにもかかわらず崇徳院が屈せざるを得ない理由はそこにこそ認められることを論じた。

2. 「菊花の約」の「友」——「己を知る者」の為に死ぬということ——

『雨月物語』冒頭的一篇、「菊花の約」は従来信義の物語として読まれてきたが、松田修による問題提起以降、作中人物の欠点が問われるようになり、むしろそのような美談であることを疑わせるテキストであるという論調が主流となった。これに対し飯倉洋一は、作品当代の価値観を踏まえれば、当時の読者が違和なくこの作品を享受したはずであるとする論を近年示した。しかし私の見るところ、この作品は美談を成立させる世俗の倫理観や功利性を一切拒絶する話に他ならず、それ故読者が違和感や戸惑いを覚えるのは必然であり、そこにこそ時代を超える作の可能性があると思われる。本篇には典拠作にはない復讐の結末が用意されるが、敵を討ち果たすという締め括りにはなっていない。そこには「己を知る」者の為に死ぬという「刺客」の物語に通じる発想が認められ、それこそが時代に制約されない普遍を垣間見せる要因になっていることを論じた。

3. 「浅茅が宿」の「烈婦」——「玉」として碎ける宮木——

『雨月物語』中の一編、「浅茅が宿」において、孤墨を守って絶命した宮木は、「玉と碎ても瓦の全きにはならはじものを」という言葉を語り、「烈婦」として称揚される。これらの表現は『剪燈新話句解』から取られたものだが、典拠における用語、時代背景を検証すれば、それは貞節を守るために女は死ぬべきであるという、儒教的発想の一端が奇形化した時代的思潮を映すものであることが分かる。そのような言葉を剪枝畸人秋成は自覺的に選び取り、外来に汚される以前の日本古代の純粹さ、万葉の乙女の「いにしへの」「をさなき心」に重ねる。この矛盾、倒錯は極めて重い問題をはらんでいる。本稿はそれについて考察し、宮木、手児女、遊女を一樣に見なす男の欲望の問題に

ついて論じた。

4. 「夢応の鯉魚」の「遊戯」——「鮮」^{あざしけ}を厭う興義——

『雨月物語』中の一編、「夢応の鯉魚」は、構想や字句の多くを先行作に借りながら、そのいずれとも異なる絶妙な世界を作り上げている。それは偏に、「絵」を描く「僧」興義の設定に因る。絵画史に照らせば、延長年間に設定されるこの画僧はリアリティを欠く。しかし、これは逆に特定の時制に限定されぬ普遍性に通じ、奇妙な既視感を読者に与えることに働く。また、「鮮」、魚肉食を厭う興義の物言いは仏教の原理とは明らかに相反するものだが、読む側はそれを仏者のものとして疑うことはない。ここには、不浄なる食を忌み、清らかな自己の保全を願う心性が見て取れる。本篇は、かくのごとき心性が希求して止まぬ、清閑の理想郷に遊戯する自己という束の間の夢を、言葉によって結晶化した、いわば究極の絵画とも称すべき作であることを論じた。

5. 「芥子」の考察——「葵」から「蛇性の姪」「仏法僧」に及ぶ——

『源氏物語』『葵』の帖において、六条御息所に生霊と化した自身の所行を思い知らせる印象的な「芥子の香」は、実はさして特徴のあるものではない。しかしだからこそ、それが我が身にまわりつくと感じることで、自身の内面のやましいものが何をしかしたのかを思い知らせる効果を持つ。本稿ではこの「芥子」のあり方に鑑み、『雨月物語』中の「蛇性の姪」「仏法僧」二篇を読み解く。前者は男に排除された女の痛みを、後者は聖地に居場所を得た悪霊の自意識を、「芥子」の語がそれぞれ映し出していることを論じた。

6. 日本古典文学に見る死体描写の系譜——「青頭巾」「吉備津の釜」を中心として——

日本古典文学に見る死体描写の有り様について、『日本三代実録』『日本霊異記』『伊勢物語』『今昔物語集』などを対照し、それが『雨月物語』、特に「吉備津の釜」の結末においてどのように継承・深化されているかを論じた。

7. 「青頭巾」の悟り——如来蔵としての「本源の心」——

『雨月物語』中の一編、「青頭巾」という作品は、従来教化する快庵と、それに圧倒される院主、そしてそれぞれの担う禅密両宗という二項関係の対照を前提に読まれてきた。しかし、本篇のどこにも宗義の差異は言及されず、実は一切問題とはされていない。むしろ両者は「本源の心」を探求し、言葉の論理を超越した「悟り」を求めることにおいて不可分の関係にあり、そこにこそ作品の核心がある。このことを「批判仏教」が提起した「如来蔵思想」批判という問題意識を手懸かりにして論じた。

8. 「黄金」の語る貨幣―「貧福論」という「閑談」^{むだこと}―

『雨月物語』の最終話「貧福論」は、同時代の談義本、経世書に見る設定や発想を映すものであることが従来指摘され、また、秋成の後年にまで及ぶ思想との連関によってその意義が量られてきた。しかし、類話との差異に照らせば、そのような既存の枠だけには収まり切らない虚構性やズレが存することが認められる。本稿は、『貧福論』がそうした虚構性やズレによって黄金と貨幣との臨界を描く物語であることを論じた。

9. 『諸道聴耳世間狙』試論―一之巻一回・三之巻一回を中心に―

秋成にとって初めて刊行された著作である浮世草子『諸道聴耳世間狙』の意義について論じた。井原西鶴以降の浮世草子作品の多くは、俗耳に入りやすいよう加工された泡沫的な作品と位置付けられ、特に「気質物」は、類型しか描けていないと否定的に見なされることも多い。秋成の浮世草子についても同様であり、例えば畢生の作である『雨月物語』に比べて低く見なされることがある。しかし、作品自体を検証した論は未だ多いとは言えない。本稿ではこれについて再検証を行い、類型では割り切れない「個性」の苦さ、暗さを鋭く剔るその独自性について論じた。

第二章 西鶴を読む

1. 決定不可能性としての「不思議」―『西鶴諸国はなし』巻一の二「見せぬところは女大工」考―

『西鶴諸国はなし』中の一編を取り上げ、多数の人物が同時に怪異を「夢見る」という場面が、一見平易な内容を語っているように見えながら、実は筋を追う読みやひとつの解釈を拒む決定不可能な「謎」をはらんでいることを論じた。そこには、時制の混濁や、主格の入れ替わりなど、精神分析に言うところの「夢の文法」にも通ずる自覚的な方法が認められる。むしろそのような観点から捉えることこそが西鶴作品にはふさわしいことを論じた。

2. 境界上の独身者―『西鶴諸国はなし』巻四の七「鯉のちらし紋」考―

『西鶴諸国はなし』中の一編である本話は、水魚豊かな「内助が淵」における人と魚の交流を描くが、作品成立時の「淵」の実態は河川の流入を断たれて「池」に退縮しており、更にその後は新田開発によって干上がる運命をたどる。また、この水域は氾濫を繰り返しており、

その治水は流域に住む者にとつては長年の悲願でもあった。本篇は牧歌的な魚女房譚であると同時に、そのように恐れられ鎮められるべき運命にあった淀川・大和川両水系の合流点を舞台とするからこそ描かれ得た、愛憎入り交じる「恋の淵」の奇譚であることを論じた。

3. 策彦の涙―『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」考―

遣明船最末期二便の遣明使を務めた臨済僧策彦周良の入明記録やその文事を通じて見えてくる人物像、日明貿易のあり方、文化交流のあり方を手がかりに、従来相対する見解が示されてきた『西鶴諸国はなし』中的一篇「八畳敷の蓮の葉」に描かれた策彦の流す涙の意味について論じた。

4. 左の腕を断つ話―『武家義理物語』巻六の二「表向きは夫婦の中垣」考―

仕える主家の娘の貞節を守るため、あえて夫婦であることを偽装した老武士は、しかし娘と通じた疑いをかけられ、それを晴らすために自ら左腕を切断するという挙に出る。しかし本篇の挿絵は作中描かれたところとは食い違い、二人の情交をほめかすような際どいものになっている。真相はどこにあるのか、切り落とされるのはなぜ左腕なのか。「慧可断臂」など我が身を切断する類話を対照し、本篇における左腕切断の意図を読み解いた。

第三章 源内を読む

1. 宙吊りの地獄―『根南志具佐』の世界―

宝暦十三年に刊行された平賀源内の戯作第一作『根南志具佐』において描かれる、地獄と現世を往還する作品世界の構造や、中洲、三股といった「境界」の有り様に着目して論じた。従来源内の戯作執筆動機は、「仕官お構い」の呪縛の元、価値相対的な虚無主義に逃げ込む消極的な行為とみなされていたが、この作品のあり方からは、むしろ形而上的な「価値」や「場」を強く志向する精神性が認められることを明らかにした。この考察を通じ、実業面で「国益」を標榜した源内の精神性が戯作執筆にも看取できることを論じた。

2. 都市神話としての可能性―『根南志具佐』の「根」についての考察―

宝暦十三年に刊行された平賀源内の戯作第一作『根南志具佐』について論じた。この作品は、当代人気歌舞伎役者の入水事故というスキャンダルを写し取る際物小説の体裁を取りながら、同時に優れて神話的な物語として読むことができる。水虎と二代目瀬川菊之丞との交情、

菊之丞の身代わりとなる荻野八重桐、これら三者の関係には、古典の世界において重要な節目である「水無月祓」の祝祭性が関わり、江戸庶民が「役者」に求める供儀・形代としての身体性という根源的な問題がそこに読み取れることを論じた。

3. 『風流志道軒伝』を読む―「空」と渡り合う貨幣の物語として―

宝暦十三年に刊行された平賀源内の戯作『風流志道軒伝』について、当時の田沼治世下の貨幣政策を対照して論じた。世界を巡り歩く主人公、若き日の深井志道軒として仮構される浅之進の姿には、異能の経済官僚川井久敬が発行した明和五匁銀、南鐔二朱銀という画期的な「名目貨幣」誕生前後の世相が映されている。それは作中で風来仙人が弄する大乘的「空」の発想にも通じている。また、源内のいわゆる「仕官お構い」の問題は、この作品が書かれた当時においては過大視されるべきではないこと、それを戯作執筆の動機とみなすべきではないことを併せて論じた。

4. 『風流志道軒伝』の異空間―江戸への憧憬―

平賀源内の戯作『風流志道軒伝』において、若き日の深井志道軒として仮構される浅之進の諸国遍歴は作の中核を成し、強く印象づけるものだが、実はこの異空間体験は浅之進に何ももたらしてはいない。彼はひたすら眺め尽くし通過するだけである。この描き方は作にとつての必然であり、また、田沼意次の経済施策の眼目であった「名目貨幣」と、それが実現する「消費経済」のありように通ずること論じた。また、浅之進が最終的に「江戸」に回帰することによって、源内にとって憧憬の異空間である「江戸」賛美の心性が示されることを論じた。

5. 平賀源内と秋田鉱山開発

平賀源内の秋田鉱山開発に関わる秋田藩史料の検討を通じて、その「国益」観のあり方を考察した。源内の「国益」観は、己の才覚によって未開の地や人に見向きもされない材料から産品を得、天下に資する富を得ようとする気宇壮大なものだが、幕藩間に交わされた熾烈な駆け引きに照らせば理想論と言わざるを得ない。その理想が破れることが後年の戯作に見る自棄的な物言いに繋がることを論じた。

第四章 「国文学」の批判的考察

1. 批判の学としての「国文学」

「国文学」なる学は、その出自において、自文化中心主義に傾斜する、更に言えば、国家主義に墮落する宿命的な病根を宿している。そ

のことを自覚し、国家主義を利用することは峻拒し、それを強化するような始原の物語などあり得ぬことを見極める critical なまなざしを持つべきことを論じた。

2. 「無常」と「美」の日本的連関についての批判的考察―『方丈記』と『徒然草』、『雨月物語』「浅茅が宿」を通じて―

仏教という外来文化に由来し、美意識とは本来全く相反するはずの「無常」という語が、「美」と結託させられ、自文化賛美的に語られる日本文化の問題について、『方丈記』と『徒然草』の比較、『雨月物語』「浅茅が宿」の検討を通じて考察した。

終章 江戸のテキストを読むということ

上田秋成の研究史を『雨月物語』と『春雨物語』を対照しつつ概観し、公刊されたテキストと手書きのテキストのそれぞれの意義について考察し、本研究で述べてきたところを改めて総括した。